インドから中国・朝鮮を経て、日本に至る地域的・歴史的な変遷を示す。

【あしゅら】

阿修羅（あしゅら）サンスクリット語アスラ（asura）の音写。阿素羅、阿須倫などとも音写するほか、冒頭の阿音アを省いて修羅とも略す。原語のアスラは、古代インド語のアフラ（ahura）に対応するが、古代インドでは多数を形成するアーリヤ人がインドラ神を首領とするデーヴァ族を善神としたため、元来は貴々しい光輝に満ちた存在であったアスラ族は、次第に悪を司る敵対的な鬼神の一種とされた。非天、無酒神とも意訳されるが、非天は、スラ（sura）に酒の意味があり、それに否定詞のア（a）をつけたもの。同じく無酒神は、別のサンスクリット語スラー（surā）が酒を意味するため、いずれも通俗的語義解釈が中国に伝わって翻訳された。仏教では、『阿含経』などの初期経典においては、帝釈天と仏道修行でも競い合う阿修羅の話が、『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』などの説に影響を受けて導入された。部派仏教の経典では輪廻転生説と結び付いて五趣説が発達する中で、一部の部派（説一切有部）は対立する天（デーヴァ）とは別の趣（道）を立て、地獄・餓鬼・畜生・人・阿修羅・天の六道説ができ上がった。中国・日本では六道説を採用し、天・人・阿修羅の三趣を三善道とする。大乗仏教になると、更に四天王・二天として仏教の中に受容されていた夜叉（ヤクシャ）、竜（ナーガ）、乾闥婆（ガンダルヴァ）に加えて、阿修羅や緊那羅などが新たに参入し、仏教を守る護法神のグループが次第に形成された。その完成形態が『法華経』『金光明経』などに登場する天龍八部衆である。

インドでは、主にデーヴァと戦う神話や説話の中で登場するが、一面二臂の通常の人間像で表現されている。ところが中央アジアの敦煌石窟では、西魏代の第二四九窟に一面四臂四目のいわゆる多臂の阿修羅が左右の上手に太陽と月を掲げて表現されている。阿修羅が太陽と月を持つのは、須弥山の北方に住む羅睺阿修羅が日食・月食を起こす凶兆と結びついたもので、『増一阿含経』などに説かれる。中国では、四川省の唐代の石窟寺院を中心に、三面六臂（一部は四臂）の阿修羅像が如来浄土の周囲に浮彫されている。スペースの関係で大部分が上半身のみで、中央手は合掌することが多い。日・月を掲げるほか、左右の残手に天杯と宝瓶を持つものが多い。同様の例は、朝鮮、盛唐北道慶州の昌林寺跡三層石塔にも見受けられるが、中国、新疆ウイグル自治区のアスターナなどから数多く出土している供養天幡の男女二神の浮物と関連することは疑いない。三面六臂像の図像は、唐末期の像とされる『新無量経』（『神陀落海金軌』）に近い。狭義の大乗仏教系の尊格なので、日本の作例は比較的少なく、その多いに満ちた表情で知られている御室仏の観音菩薩像（国宝）と、千手観音の一十八部衆の一尊としての京都・蓮華王院（三十三間堂）の木彫像（国宝）がある。（植溝本宏）

［アスラ像 ――ぞう］ インド、ウッタル・プラデーシュ州グワーリアル博物館蔵。インドのアスラ（阿修羅）は、『阿含経』などの初期経典には少なからず登場するが、単独で美術表現されることはまれである。『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』など叙事詩が成立して、シヴァ神やヴィシュヌ神を中心としたヒンドゥー教の神話が発達すると、珍しくアスラが表現されることがある。グワーリアル博物館には、ヒンドゥー教の乳海攪拌の神話を表現した浮彫彫像が飾られている。口元の天鳥の背の上に、ヴァスキ竜を巻き付けた攪拌棒としてのマンダラ山があり、その向かって左方に一面四臂で上手に法輪と法螺貝を持つヴィシュヌ神を、右方に一面二臂の常人相として高い宝冠をかぶったアスラが表されている。インドや東南アジアでは、アスラは歳かに異種の存在であるが、中央アジア・中国・日本のように多面多臂で表現せず、通常の人間と同様の姿をとっている。（植溝本宏）

［阿須羅像 ――あすらぞう］ 中国、甘粛省敦煌市・莫高窟第二四九窟窟頂西斜面の壁画。祁連山を中心とする仏教世界を守護する護法神阿須羅は、中央アジアを含む中国の西部に多数の作例が遺っている。莫高窟第二四九窟は六世紀後半の西魏代の造営で、恢斗式の窟頂西面に四面四臂の阿須羅像が墨彩に描かれている。祁連山を背にして大海に両足を踏ん張って立ち、四臂のうち左右の上手には、円形の太陽と月を捧げ持っている。太陽と月をともに持つことは、世界を司る象徴となるとともに、インド神話以来の日食・月食を引き起こす可能性も内包している。身体は全体的に茶色に塗られ、太い輪郭線で表現する。腰部にはインド風の裙を巻き付け、上下二方の左右に天衣を翻す。特徴的なのは顔面の描写で、眉間を白色で長く表現し、その左右に二眼ずつ、計四眼を白色で示している。左右二つの下手は、比較的自由なポーズであるが、後の多面多臂（例えば三面六臂）の場合、中央の二手は次第に合掌の印となっていくが、同様に中国でも初期の作例であり、合掌していない。（植溝本宏）

阿須羅像（敦煌莫高窟第二四九窟窟頂西斜面壁画）

［阿修羅立像 ――あしゅらりゅうぞう］ 国宝。奈良市興福寺蔵。脱活乾漆造。像高一五三・四センチ。国宝館安置。その怒いに満ちた表情、華奢とも思われる身体のバランス、そして脱活乾漆の高度な技法によって多くの人を引きつける本像は、光明皇后が母橘三千代の冥福を祈って造営を発願

見出し

読みを示す。

原語を示す。

別称等を示す。

見出しに関連する作例・作品、事項などを解説する。

所蔵先を示す。

所蔵先や基本的なデータを項目初めに掲げる。

執筆者名を示す。

鑑賞の手引きとなるポイントを示す。